

俳句雜誌

令和元年七月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十二卷第七号

水 明

2019 7月号



信 風 節 季



おなじみの「百合」

咽せるような香り

品種はいろいろ……

風格から言えば

「カサブランカ」

アラビア語で

「白い家」の意があると

聞いて納得

夏燕光り逆らふ瀬風かな

長谷川かな女

宿下駄の片減りて踏む花火屑

長谷川秋子

甲虫の頭突きはじまる一樹の乱

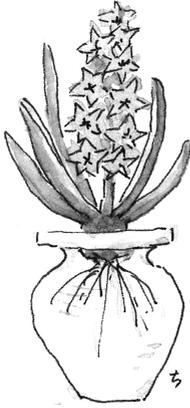
星野紗一

摺り足

山本 鬼之介

苔葺きの茶亭いろどる鉄線花
初夏や常の着物も粋なひと
小太りの鯉を主座に魚の棚
新調の赤ちやうちんに薄暑の灯
時の日や長針だけの園児の絵
薪能われは心の足はこび
飛魚が処女航海の船を追ふ
葉柳やそろそろ出番「お岩さま」

季
音
雪



旅の宿 星野和葉

一宿の女将の手より花うつぎ
杖の音静か卯の花垣を行く
窓少し開けて瀬音を鮎の宿
梅酒濃し女ばかりの旅の宿
深呼吸して近寄りぬ蓮の花

涼し 茂木和子

草笛をぶつきら棒に童唄
草笛を吹き込み上ぐる熱きもの
口笛の呼ぶ涼風や愛唱歌
緑蔭や膝に「みすゞ」の単行本
緑の夜追風用意にくい奴

夏 草 森 千代子

初 夏 山中順子

夏草群生刈りに来たれど立ち入れず
夏草に思ふことも無き素顔
振り向けば夏草の山動きたり
夏草を刈つてからりと夕あかり
夏草や晴耕雨読日課とし

わつと出て野を驚かす初蕨
性別の欄に「女」と初蛙
花菖蒲雨くる前の眠さかな
ピアスして初夏一番の大漁旗
かはほりや小さく点す常夜燈

鯉 船 矢作水尾

聖 五 月 山中みどり

本堂の闇のしかかる薪能
一本釣の秘めたる鼓動鯉船
一堂と家紋ひらめく鯉船
万葉の森にけぶりし藤の花
草餅や婆は大ぶり作る癖

橋渡る薫風にシャツはらませて
風薫り仁王立ちなるスカイツリー
五月場所川風にのる寄せ太鼓
幕下の結ひ初め鬘や青嵐
白和へを根来の椀にみどりの日

風 薫 る 由 良 ゆら女

令和元年五月 網野月を

乾杯の一声高く風薫る
一陣の風に蓮池裏返る
生かされてカーネーションの赤が好き
高速のめぐる眼下やバラの海
薔薇苑の囚はれ人に夕日影

風止んで日差しを通す若楓
割り切れぬことがあつても竹の秋
白バラの負ひ傷赤の負はせ傷
怒るやうに口説き文句を夕薄暑
万物の顎の見上げる五月空

人 の 胸 吉住光弥

海に向く窓 石井喜恵

葉桜燦上野に東寺の仏たち
暁天の葉桜を突き太極拳
滝行の行者の守護や岩燕
牡丹浄土に観音の庭人の胸
幸せのあした嚙む音筍飯

夏近し未完のビルの完成図
新人の野外研修花菜風
花は葉に野心本心老婆心
春北風轍斜めに切る轍
海に向く窓は全開岩燕

方便 石山 かつ子

何某某 大村 節代

性格は少しお跳ねをまつり髪
性悪な女いそいそ夏芝居
花水木監視カメラの何処を向く
おくれたる方便もなし汗を拭く
締めとして筍飯を遠忌かな

方丈あまねく百万遍の初夏の景
何なにがし某某と名乗る男へ新茶くむ
葉桜に仮面のやうな顔ならぶ
葉桜やしつかり結ぶ靴の紐
草笛吹きついでにひよいと小川飛ぶ

地潜り 大橋 廸代

海桐花咲く 栢尾 さく子

闖入の蛇の始末を引きうける
越の酒に目の据りたる地潜りよ
蛇かかげ砲丸投の助走かな
一の宮へとぐるの蛇を抛りけり
蛇消えて大吟醸のかをる四囲

海桐花咲く幾曲りして傾ぐ径
海桐花咲き記憶の黒き孤島泛く
島に入る道まつすぐや夏つばめ
漂泊の羽音が混じる青葉汐
落慶や麦秋の野の只中に

麦の秋 菊池ひろこ

麦の秋夜間飛行の灯が遅々と
葉隠れに無人の小舟行々子
薔薇の葉も茎も錆色春深し
鎧戸の窓に蔓薔薇陣張れり
花クレソンの水に柵錠して富めり

大欠伸 小林萬二郎

ひとときを漫ろに凌ぐところてん
駄菓子屋が押出す季節心天
「葉隠」の風が鍛へし実梅かな
青梅の葉裏は太りの指定席
明易しお伴の犬も大欠伸

夏便り 五明昇

草餅や上ル下ルの京の町
天に富士茶摘の丘の匂ひ立つ
春愁を括りて朝の資源ごみ
泰然と富士に真向かふ花薔
水使ふ音切れ目なく夏隣

旅鞆 境延昭

春愁ひ母音の丸き島ことば
夏近しはち切れさうな旅鞆
村里は将門びいき武者幟
ゴスペルソング葉桜の校舎より
葉桜の中で別れを告げらるる

インスピレーション

椎野美代子

惜

春

鈴木康世

すべらかしの皇女の降り立つ藤の棚
ブラックホール藤波昏く揺れやまず
藤の房まさぐる五指は生けにへに
藤房の先の先まで媚薬なる
雅かな耳鳴り初むる藤の園

田の神を呼ぶ法螺貝や春逝くか
地球儀をくるり回して春惜しむ
行く春や嬰の欠伸のいとけなし
変りゆく海の色度や夏近し
別れたる人に逢ふごと余花に逢ふ

五月の花 島津初花

君 永野史代

白色と紅赤競ふシヤクナゲ花
薔薇園にハーブの調べ流れをり
楽水紙の団扇に潜む花と蝶
マーガレット琉球ガラスの一輪挿し
花占ひマーガレットを抱く少女

臙から臙へわが身揺らぎをり
忍びつつ上野の柳に君待てり
銀座の柳くぐれば君の笑顔かな
「君死にたまふこと勿れ」惜春
臙月遙かに在すブラックホール

朱 夏 西山 貴美子

五右衛門風呂 服部 みどり

いくたびも誉めちぎられて子供の日
大型連休待ちに待つたる生簀船
ワインゼリー使ひ古しの指に享く
校倉の蔭に影置く実梅かな
気にかかる浮き名が一つ古団扇

嬰兒に産湯溢れてさくらんぼ
貰ひ湯は五右衛門風呂や昭和の日
歩けるは何と倅せ月見草
親指姫の現れさうなチューリップ
若葉冷指の間漏るる化粧水

(順送り)

若葉どき 波多野 寿子

巡り逢ふ木曾の霊神聖五月
黒塗りの茶屋の木椅子や木曾の初夏
江戸名残見せる大橋夏の川
夏の茶屋木曾節うれし箸袋
猿が跳び出る木曾の山径若葉どき

☆

☆

季音月

比叡山

鳥羽和風

噴水の上がる高さに比叡山
万緑やダム満水の水を吐く
ででむしの雨を悦ぶ角二本
染抜きの家紋を羽織る夏の蝶
言祝ぐや柱の疵も子供の日

熊野詣で

吉澤純枝

一笛に月の雫の薪能
鬼面にもかすかな憂ひ薪能
小面に火の色ゆるる薪能
薫風に熊野詣での杖を買ふ
記憶より小さき母校風薫る

宿敵

小倉倭子

「プリンセス」のひときは白き薔薇の聖
口髭を薔薇に近づけ異邦人
紅薔薇に妬みて弾く爪の先
宿敵を思ひ詰むれば薔薇傷む
一本のばらを机上に少年の忌

木洩れ日

柚木治子

再会の高々あぐる白日傘
茶房出てうふふの空へ差す日傘
ためらひて呼鈴鳴らす日傘かな
日傘選る見返り美人のポーズして
木洩れ日や日傘の影を踏みさうに

跳ね橋

宇田白鷺

若鮎やはねて園児の手を離れ
ポーリングピンの弾けて夏来る
夏に入る昔跳ね橋ありし道
突つ走る初夏の樹林や伊吹山
若き日は引出しにありサンデラス

薫風

十倉和子

麦秋の貨車ながながと湖に沿ふ
明け放つ天守や薫風吹き渡る
薫風にふくらむ長谷の五色幕
青嵐ガラスの馬も駆けて出よ
袋回しの果の雑魚寝や明易き

麦の風

森田祥絵

散葉の効く頃合や目借時
友癒えて燃ゆるつつじの中を行く
街若葉首より吊す社員証
万緑や雨が緑となる夕べ
倒立の女子しなやかに麦の風

卯の花明り

丸山マスマ

見送りて佇む路地の朧かな
透き通るスーヴを卓に夏近し
露天湯へ誘ふ卯の花明りかな
割箸にほどよく馴染む心太
上棟式の棟梁きりつと新樹光

聖五月

伊藤敦子

西方に白き三ヶ月明け易し
丹精の一番咲きの薔薇供ふ
はつなつの三大テナー聴く至福
人も樹も四海渦巻く聖五月
青嵐や宇宙の護美も舞ひ上げて

あづさゝ

渡辺舎人

大樹なる玄妙の陰ほと遅桜
来ては泥ついばむ燕復た還る
花ざくろまるごと愛し愛されず
集ぶ彩に百の芽百の毬潜め
泥中の楽土に亀る松落葉

新茶

岡野順子

先づ新茶仏の夫と共に汲む
ぼたりぼたり新茶の音を聞き分けて
海の日のガントリークレーン我が物顔
五月雨や子の記念樹の逞しく
青梅をきちきち洗ひ律儀者

直球 高島寛治

惜春は敢へて折鶴解く如
決め球は直球一途夏近し
べちやんこの座蒲団も良し心太
道標の木の香新し夏の山
枕木は木琴の如夏の山
五月の風 田寺玲子

薫風やジャズで見送る豪華船
出港のテープ飛び交ふ風五月
回廊を菩薩となりて練供養
サリーの裾五月の風のたはむる
緑さす窓辺に開く新刊書
小学校 松本光子

ひと村を奮ひ立たせし初幟
植田澄み声の湧きだす小学校
先頭は少年二人植田道
金魚金魚マリリンモンロー泳ぎ出す
光沢の髭ごきぶりの上等兵

風薫る 森本早苗

緋鯉跳ね令和の御代を祝ぎぬ
風薫る神戸北野のジャズライブ
風薫る仁王の相で布団たいこ太鼓こ昇く
マニキュアの乾くひととき柏餅
青い芥子嗶がれ色に咲きにけり
新緑 川野妙子

香水のひとふき胸に人と逢ふ
薔薇咲かせ住宅街の茶房かな
新緑の瀬音激しき昇仙峡
新緑の茶店に魚焼く男
大太鼓ずんずん胸に夏の宿
薫風 田村みどり

校庭に光と薫風十連休
嬰兒の服は手洗ひ風薫る
風薫る洗ひ晒しの作務衣にも
住み馴れし庭にはあれど風薫る
張り裂けんばかりに鱗をあごの飛ぶ

岩 塩 町野 広子

どの窓も灯るアパート街
草朧白杖人に添ふて行く
岩塩で野草の天ふら風光る
花曇り電子辞書より鳥の声
青柳たてがみ靡かせ牧の馬
麦の秋 井上 燈 女

草いきれ休み田に立つ売地札
百年の母屋改築夏座敷
み仏は千手さしのべ風青し
心地よき鳴き声返へる枝蛙
刈取機老農ひとり麦の秋
夏 近 し 内田 恵 子

草原を紙飛行機ようららけし
抜け道はどこにあるのか城朧
朧夜や魔女調合の惚れ葉
人間を拒む絶壁岩つばめ
全円のスカートくるり夏近し

卯月波 中尾 笑子

卯月波御陣乗太鼓が迎へ撃つ
遠郭公東電小屋に目を細め
海のある町のくらしも夏仕度
セピア色の写真に残るカンカン帽
先棒の威勢はじくる三社祭
夏 来 る 藤澤 喜 久

杖捨てて背柱目覚めよ夏来る
時の日や短気損気の血すぢひき
番傘の屋号「きく乃湯」五月雨
天城越え山百合咽ぶごと咲けり
時の日や生ある者の持ち時間
メラトニン 荒井 俱 子

メラトニン浴びて春愁吹き飛ばす
子の耳に遊ぶ後れ毛街薄暑
かたくなに守る土蔵や柿若葉
掟のやうに友より新茶届きけり
初物は長寿の秘訣新茶酌む

黒 黴 池田雅夫

置き傘の出払ひ尽し菖蒲園
黒黴やにはかに増ゆる妻の愚痴
堂堂と我が道をゆくなめくぢり
かつと目を見開く蜥蜴やぶ睨み
出るところへ出て潔白の油虫

若葉風 井関礼子

列島の大きなうねり五月かな
元号の節目に遇ふも若葉時
柿若葉精気を貫ふ里の途
山裾の無垢なる牡丹園一と日
花届く母の日冥利の一と日かな

米寿の祝 加藤むら子

身内らの米寿を祝ふ初夏の伊豆
白波の歓迎夏めく水平線
夏立つや酒蔵巡る觀光バス
源流の豊かになりし立夏かな
ふるさとの植田に昭和偲びけり

竹落葉 川崎道子

石仏のまどろみ覚ます竹落葉
天心を貫きさうな今年竹
葉桜やすらすら九九を諳んずる
フルフェース脱げば乙女よ風薫る
風薫る鞭びしびしと女性騎手

泥弄る 霜中冬至

夕さりや令和寿ぎ豆御飯
噴水を見詰め病歴語る友
百年の変らぬみどり小浜線
たかんなの裏年と云ふ爺元氣
母の日や若嫁も出て泥弄る

☆ ☆

季音花

月詣で 原田想子

万緑に打ち振る鍬の峽に生き
 翻る天にも地にも夏燕
 杖歩行支へ金婚桐の花
 かんこどりの墓にくれけり月詣で
 野に戻り抱卵の鶴たくましき
 手のモデル 山田美佐尾
 夏を待つ挺庫の重き扉開く
 白壁の続く図書館クレマチス
 疵残し眠る甲冑藤の花
 仄仄と卯月の寺の常夜灯
 夏近み心も撓ふ手のモデル

若楓 大場順子

花冷えやしまひしままの舞扇
 蜆汁我が身に合はす養生訓
 美容師に髪をあづけて目借り時
 さしのべし稚の手透くる若楓
 久闊を叙し名水の新茶汲む

夏近し 井上玲子

総身に樹海の息吹夏近し
 眼前を切り裂く飛翔岩燕
 麦秋や入り日追ひ行く鳥の群
 麦の秋われの一步に雀散る
 夕映えの八橋に聴く行々子

白磁 田中千穂

早苗田を背に大道芸の傘廻す
 白磁に注ぐ夫の好みの宇治新茶
 千切りを嫌うてはぬる春キャベツ
 ぎゆつと抱き生確かむる甘藍よ
 葉桜や艶をとどめて待つ出番

鉄線花 森川義子

鉄線や禰宜の袴の濃むらさき
回り道して帽子買ふ夏隣
朝日浴ぶ綺羅をつくして芝青む
若芝の夜来の雨に輝ける
将棋指す常連に野次藤の下

初夏 松宮保人

灌仏会注げば手伸び足が伸び
石山に若葉もみぢの競演す
べんずりの膝を摩りし初夏の寺
母の日に好きな紫色の供華
ばけ封じ頼む岩間や著莪の花

南風 宮崎雅訓

登校の列はきはきと南風
南風茶髪を黒に戻す女子
八時半チャイムを運ぶ南風
南風初恋肌に感じさせ
見開きの頁ぺらぺら南風

二輪草 野口和子

改元に沸き立つ巷夏に入る
明々と深き藪間の二輪草
川筋は白鷺跳びし滑走路
地を這ひて揚羽蝶今生まれたて
親燕見分けのつかぬ父と母

桐の花 松山清子

勤行の木魚響けり蟻地獄
薄紙のやうな思ひ出桐の花
園児等の列のゆらゆら罌粟の花
朝どりの烏賊の刺身の足動き
天守への裏坂嶮し青時雨

母の日 秋山冷子

歯切れよき新任教諭若葉光
花は葉に出入りはげしく雑居ビル
句碑を這ふ蜥蜴に詩心ありしかな
今年竹ふつと昼月下り来る
母の日や百を生きよとスニーカー

風薫る 中野 疆

名園に田あり野もある五月かな
天守閣万緑もまた城となる
風薫る神楽の舞の能舞台
お茶会の新緑の座につきにけり
地引網それひけ初夏の浜楽し

夏落葉 鈴木みや

鯉のほり合はざる鍵は呑みこめず
ネイルせし先生の指さくらんぼ
夏落葉のらぬ自転車三年目
告白はバラの満開すぎし頃
薫風やふくらむ夢を子と語る

時間 井口俊晴

薊とは距離おく犬の好奇心
豪勢な時間咲かせて牡丹かな
「プリンス」と呼ばれし薔薇の半世紀
寝たままの苗もいくつか植田かな
銀の剣を飾り子供の日

草笛 上戸 千津子

軒菖蒲伝統映ゆる里の家
城址より草笛の音や雲流る
庭清水昔を語る水の倉
花茨香で引き寄する陣屋跡
九十九折越えて六甲風薫る

桐の花 西浦 千枝子

陽の透ける母丹精の白薔薇に
南紀へのドライブが好き花蜜柑
渋滞避け奥へ奥へと桐の花
友見舞ひ胸なでおろす二重虹
此のアラームでセール始まる柿若葉

聖五月 菅原 知子

少年が青年になる聖五月
木香薔薇のつづく垣根のチャイム押す
バラ手折る嫌ひなやつに牙を剥く
君にまだ言えぬことあり犬ふぐり
青東風や七半連なり疾駆

プリンセスミチコ

福田千春

薔薇園の「プリンセスミチコ」咲き始む
修復に天使現はれ聖五月
薄暑かな好きな普段着手で洗ふ
才能も器量も中よソーダ水
ライ麦のパンの強つく聖五月

植田

福田藤十郎

きのふ水張るやたちまち今朝植田
赤城嶺を映し植田の広ごりぬ
植田にも酒一献の馬鋏洗ひ
通学の児らをば写す植田かな
鏡なる植田の命二三日

菖蒲の湯

後藤綾子

花卯木浅間の嶺のよな曇り
白服や未だぎごちなき挙手の礼
更衣心機一転図りけり
胸中の虫流さんと菖蒲の湯
菖蒲湯の豊かな香り家に満つ

鳥三態

加藤草太郎

葉桜となりし堤に鳴く鴉
風に未だ慣れぬ植田のいとけなし
病床に聞く常ならぬ瑠璃鶺鴒
饗膳に泰山木の花の盤
泰山木の花の雨水に戯るる鳥

風薫る

梅澤佐江

匂やかな木々のさざめき夏近し
リフォームの壁紙真白夏隣
予約席の白きナプキン夏来る
隠岐までの航路を共につばめ魚
風薫るきりりと締むる博多帯

新樹

野平美紗子

夕さりて風に乗りくる夏祭
夏雲や声をかき消すナイアガラ
キャンパスの新樹の包み込む二人
竣工の社光りて風薫る
荒川の土手より武甲新樹晴

六月の窓 松井 由紀子

主なき椅子 六月の窓に向く
筆筒に夫のペンあり青葉梅雨
鬼遊びいまも茂みの胸さわぎ
山の子が手を振る 鉄路山法師
長生きや太鼓連打のはたた神

五月晴 矢島 清

五月晴誰れも拾はぬ一円貨
たてがみを揺らす名馬の五月かな
それとなく藤湧き出づる奥秩父
花嫁の感謝のことば 風五月
五月晴晒し 木綿の肌触り

☆ ☆

第56回現代俳句全国大会

作品募集

投句締切は 7月31日 (必着)

◆応募規定◆

□投句料

①雑詠2句一組で2千円、何組でも可。

新作未発表作品に限る。「3組(6句)同時投句に限り、6千円を5千円にいたします」

②題詠1句(無料)新元号の漢字1字又は2字を詠込み・題詠のみの投句は不可。

前書き不可。所定用紙使用。〒、住所、お名前、電話番号、協会員・会員外の別を明記。投句料は定額小為替(無記名)又は現金書留に限る。(必ず作品同封の事)

□送付先 〒101-0021 東京都千代田区外神田6-5-4 倍楽ビル7階 現代俳句協会全国大会係 ☎03-3839-8190

□締切 7月31日必着

□顕彰 優秀作品を協会の機関誌「現代俳句」に発表するほか、協会刊行物に採録。

□賞 大会賞、各後援団体賞、特別選者賞、秀逸賞、佳作賞、他。

□全国大会

平成31年11月16日(土)午後一時より、「東天紅」上野店〒110-0008 東京都台東区池之端1-4-33 ☎03-3828-5111

□記念講演 森まゆみ先生(作家・東京大学大学院情報学環客員教授)「根岸に生きた子規」

□講師 中村和弘会長はじめ協会幹部

□後援 文化庁、毎日新聞社、読売新聞社、産経新聞社(他新聞各社にも申請中)

□懇親会 午後5時より(会費6千円)

【主催】現代俳句協会 【後援】文化庁・毎日新聞社・読売新聞社・産経新聞社(他新聞社にも後援申請中です。)

自選二十句

加藤草太郎

発破音つちふる秩父盆地かな
マウンドに父と佇む卒業子
道それで紅差す尼や徒ち遍路
囀や天から地から九輪から
箱根路や殿様蛙先導す
春灯まだ伸びてゐる生命線
ひとつ手を空けて人待つ蛍の夜
男坂ををんな扇の荒使ひ
親は子の片陰となり浜の路

この浜に立てばあの日を雲の峰
願ひにも序でのありて星祭り
夜の田の風に打ち鳴る引^ひ板^たの筒
大北風や言葉少なき診療所
諍ひを音なく仕切る白障子
教へ子の医師に診らるる風邪の胸
冬蝶のさがす日溜りまでの翅
洗ひ菜の水切つて知る春隣
息綱にこころ休ませ海女の笛
草萌ゆる困民党の起ちし里
ヤンキーが真面目を通す卒業日

大慶至極

小倉 倭子

轉りや天から地から九輪から

「草太郎」恵比寿顔で頬を少し染め、元学園長は教室中響く声で名乗りを上げる。

選句者も張り合いがある。

令和元年 水明賞お目出度うございます。

掲句は平成三十年七月号の巻頭に輝き、正に草太郎氏の代表句の中の一旬であり、まるで、天からの授かり句である。

思うがまま大胆に「から、から、から」と格助詞で連鎖させ季語の「轉」を自ずと強調、自然体の一行詩を生ず。また、

九輪という仏塔の装飾の発見が作者の立ち位置を確かにさせ天地人を沸かせ大慶至極なり。

昭和十六年八月秩父に生れ地元の小・中・高校卒業

昭和三十五年埼玉大学入学 数学専攻

昭和三十九年四月学校法人城北学園に奉職

四十七年間教職、その間、学校長、学園長を務め平成

二十三年勇退。

現在学園理事。趣味は俳句、詩、農業他。

俳句を始めたのは、ある人？から「大歳時記」が送られ、添え文に「俳句を趣味とせよ」と書かれてあり、それが元で日本語の奥深さに魅せられたのが俳句入門の切っ掛けという。平成二十三年三月水明入会。同年十一月号に水明句会紹介「俳句の手ほどき」(現・主宰教室)で初登場。

虹の尾の消え入る谿の深さかな

蛸やわたり廊下のながき宿

哀歌には秋の燈とハイボール

潜り戸をぬけてきたるや秋の風

デビュー年に於いて、この「様」なる句が並ぶ。

虹の尾の見えない先まで思いを馳せ谿の深さを推し測るとは、さすが数学者。

次句は老舗の宿の鶯張りの長い廊下を渡りながら蛸の散々と鳴く緑深き宿の情景が浮かぶ。哀歌は昭和歌謡やジャズをイメージさせハイボールと合うのだろう。又、秋の燈は戦後の銀座や浅草のノスタルジアを醸す。

平成二十五年一月号より俳句「加藤草太郎」と名告る。

白菜を抱けば「ぎゅつ」と鳴る重さ

白菜を掲げ凱旋気分かな

洗ひ菜の水切つて知る春隣

農業を趣味としている草太郎氏ならではの実感句である。

白菜を、幼子を抱く如く抱えた感寤と満足感が、みごとに表現されている。きつと、幼い頃の央平君を抱き上げた時を

想い起こされたのである。次句は意気洋洋とした気分が伝わる。冬から春への間合いの季感を、洗い菜の水を切った瞬間に肌で感じ取った触感、これも巧みな句である。

冬蝶のさがす日溜りまでの翅
親は子の片蔭となり浜の路

か細い、この翅で日溜りのある場所まで羽搏いて行けるのだろうか。冬蝶の生きんとする健気な様子を見守り気遣う作者のやさしい心根をみる。次句、親は子を身を以て片影を作ら炎天の浜路を歩んでいる、人生観とみてとれる句である。写実と共に心象が自然体で伝わってくる草太郎句。平成三十年九月号の巻頭句に輝いた中の一句である。

加藤草太郎氏の人となりを知るには俳句以前よりの、詩に造詣深い、詩人「加藤健治」氏存在である。詩との出合いは水明誌二〇一七年一月号、リレーエッセイ「私が出合った人と詩人と詩」で、水明読者は感銘を受けたことを思い出すだろう。教師となり四年を経た時期、結核性助膜を患い、秩父の実家で療養中、兄の書棚にあった高村光太郎詩集を目にしたのが切っ掛けで、村上昭夫の詩「病い」に魅せられ、自分の病いをポジティブに考えられ回復し、教壇に復帰された。四十七年間の教員生活中、詩を携え卒業生達に毎年、詩を記した年賀状を送っていた。加藤先生からの、その年賀状は卒業生達の間で大切に保管されており「先生の還暦祝いに賀状の詩を中心に詩を編み加藤先生に贈りたい」と、その思いが一冊の宝の詩集となった。

詩集「正月遊戯」加藤健治

六十編の詩にはヒューマニティーが溢れ、この先生にして、この卒業生達との深い絆の証の詩集である。

草太郎俳句にボエムをみるのは自然の形態とっていいだろう。

平成三十一年から令和元年五月迄の特選句を掲げてみる。

回り場は母屋のぐるり白樫

竹槍を春陽に曝す歴史観

昇る日に霞ほぐれゆく阜

病床に聞く常あらぬ瑠璃鶏

氏は今年に入ってから咽と違和感を覚え、近所の医院ではつきりせず紹介の大病院での検査入院を待ちつ、四月より岩槻教室の、欠席投句は親友の藤十郎氏が預り、佳句を詠んでいた。

この期間中に草太郎氏から携帯で「水明賞受賞者ノオト」を私は仰せ付かる。手紙・携帯・メールを時折下さり五月三十一日のメールでは本日入院した旨と、「俳句をやっている良かった、病いにポジティブになれ、絶対勝つから祝勝会してね」と。固い約束をメールで交わした。

句友全員の気持を詠み上げた、この句を以て祝勝会、水明賞祝待ってる！

「友癒えよ癒えよと鉄線咲きのぼる」

（「俳句の手ほどき」大高ます美）

自選二十句

梅澤 佐江

おごそかな初東雲といふ未来
寒の水飲みて心の禊かな
今生の聖女でをれぬ白椿
吾もまた遊糸の芯となる過客
産声の待たるる窓や春の月
薄墨の愁ひを秘めて飛花落花
散り際は自刃のごとし緋の牡丹
露剥くや萌黄に染まりゆく心
フルートの銀の音色や青葉風

岐路に立つ時はこの橋紅の花
空蟬となりても力残す爪
みどり兎の爪透きとほる梅雨の明
大夕焼わが終章も斯く有れと
人恋へばたちまち烟る天の川
序の舞の静けさに似て桐一葉
篠笛に更なる静寂月祀る
真つ当に生きてひとりの夜業かな
恋の矢の飛んできさうな赤林檎
星降る夜花ひひらぎの匂ひ濃し
大根のああ赤心の白さかな

貴石の輝きその後

山中 順子

貴石の輝きの新珠賞からしばらくぶりの受賞である。

母の日のカーネーションの白を買ひ

色褪せて亡父の句集麦の秋

柳屋のポマード今も父の日よ

この頃の句にはまだ娘心の抜けない愛しさが残っていたがそこへいくと最近の佐江俳句は一度むけた大人の思案を発信して一途な念のようなものが伝わって来る。

極く最近の句に、

帰つて来て心も解かず薪ストーブ

縛るるに人の心と毛糸玉

心の句が二句私の胸を打つて来た。帰つて来ての身体感覚は他の人には分らない程つらい事を抱えて来たのである。そしてその心を解く余裕もなくストーブの前に座り込んでしまった。こんなに重苦しい自分の心を、俳句に詠み込まれる作者の成長に目を見張ってしまう。二句目も縛られてしまった

心を解くには毛糸玉のもつれを時間をかけて一本の糸に解いている佐江さんの孤独感が愛おしくなる。

最近はお孫さんを授かり日常の生活に多忙を極めているが、母から祖母になり孫は目の中に入れても痛くない程可愛いものである。それに溺れず力強い佐江さんが望ましい。そんな彼女と会ったのがもう十五年も前になるか、春日部のカルチャーに紫黄先生の指導を受けに入会して来た時からである。その頃の記憶は鮮明ではないが、とにかく熱心さは今と変わらない。前にも書いたが自分のライフワークを自信をもって生活を実守っている精神は本当に感心させられる。だから時々その様な句を発表するが、それはそれで佐江さんのストーリーであるからそのまま進んでほしい。

寒の水飲みて心の禊かな

朝まだき水の匂ひの柳の芽

海芋の白少女は水の匂ひかな

手に囲ふ水の匂ひの初雪

人間、水と塩があれば生きられると言われるが、水はいろいろに変化する。その水を媒体として作句する手法は常套ではあるが、そこはそこ逃げて読み手に任ずる手法も心得て来た。寒の水は体に効き、朝の水は正に新鮮な匂い、少女は無垢なる水、螢の水は少し生ぐさいが生きる力の匂いである。

いろいろな水を想像するとおいしい水を探して旅に出たくなる。若狭の名水百選瓜割の水も思い出される一つである。
水明賞受賞句に戻る。

みどり児の爪透きとほる梅雨の明

吾もまた遊子の芯となる過客

春疾風会ひたき人に逢ひにゆく

短夜の心弾ます予約席

岐路に立つ時はこの橋紅の花

どの子にも青き空あり運動会

人間を詠むと生命の存在をじんわりと近づけてくれる。生まれた子の爪は本当に桜貝のように柔らかく薄い。季語が語ってくれる。遊子の芯となるとは何なのか。説明すると句が毀れてしまうから止めよう。会いたき人に逢う。この二つの会、逢を使い分けた気持の弾みが伝わってくる。そして逢いたき人に会えて予約席に落つく、舞台が整いすぎるかな。岐路とは又深刻ではないか、何をそんなに思い詰めなくてはならないのか話してごらんと言いたくなる。空は公平であるぐんと明るい面も持っているから安心する。

この六句からこの作者の心状はまだ解けないが、俳句というものは不思議なもので無理に迷を解かなくてもいい。独創的な捉え方を十七文字に託して折りたい気にもなる。

佐江さんとは月に三回句会が一緒であるのでいつも会って楽しんでる。しかし俳句を通しての友なので私生活は全く

分らない。唯一生懸命生きている姿勢は伝わってくる。それが時々俳句に現れるから難解になる。しかしそんなことはおかまいなしに堂々と主張する根性が好きだ。

淑女てふ仮面の奥の雪をんな

正に佐江俳句の根元であろう。そして無駄でない余韻を残してくる。こんな技をいつの間に学んだのだろうか。

秋の雨爪切る夜の膝を抱く

夜爪を切ると親の死に目に会えないと昔から言われていたが足の爪を切るのには膝を抱かないと切れない。秋の雨の静かな音は夜でないと聞こえない。だから夜がいい。

さて紙面も詰ってきたのでこれからの佐江さんにエールを送りたい。日頃佐江俳句に接しているが、時々情に流されやすい句がある。が、それを何とか自分の句にしてくるからの成長は著しいものがある。又恋の句も多いが経験からくるのか真実か分からないが納得させられる。

初恋は詰襟のまま実千両

人恋へばたちまち烟る天の川

空蟬になりても力残す爪

最後に沢山の可能性を持っている作家です。迷わず今自分が進みたい道を歩いて欲しい。

水明賞おめでとう。心よりお祝申し上げます。

山本鬼之介 選



北国の春を探しに五能線
春の宵記念碑だけの数寄屋橋
汐干くれて今夜ぶつかけ深川井
再びの丸型ポスト暮の春
行く春や逆立ちで見る古校舎

俗体の僧に夜毎の濃山吹
花朧回廊よぎる巫女の影
潮干狩縄文人の体を成す
潮干狩後退りして尻と尻
うばすての裾野を列の遠足子

さいたま 洪谷きいち

横浜 正木 萬蝶

只今はリフォーム中なりつばくらめ
酒林躲して飛ぶや初燕

高崎 原田 秀子

茶柱の吉兆来たり初つばめ
野遊びやすこし濃い目のいなり寿し
退院の間近き友や初つばめ

さいたま 日高 徹

みちのくの老花守の深き皺
堰を越え早瀬をかくる花筏
SLの汽笛呑み込む春の山
鳥雲に入りたる辺り母御座す
春禽の声追ひかくる調神社

川口 野田 静香

すれ違ふ佐保姫の影萌黄色
美術館出て三角の空の春
美術糖の溶けゆく間合桜まじ
断トツの記録更新風ひかる
藤の花紙幣とならむ梅子の図

行田 近藤 徹平

太棹を競ふ津軽路春疾風
秩父路の札所に演歌春惜しむ
ノースайд大の字に寝る春の芝
春の灯やおあとの気配待つ前座
板前の背の魚拓や春の宵

御破算はものの始めよ草を焼く

さいたま 保坂 翔太

さいたま 青木 鶴城

凍返る出刃包丁が匕首に

若鮎の命滾らせ堰を超ゆ

旅客機が音の尾を引く大霞

初蝶や城址の風のやはらかき

しだれ咲く天地一つに大桜

水が水押し上げて落つ春の堰

紋白蝶杖つく姥のあとやさき

飛び回る影やはらかし紋白蝶

春の夜の子らを相手の手品かな

上尾 横山 君夫

曲淵 徹雄

草餅や左利きなる幼児の手

こはれゆく膝をなだめて蓬餅

肅然と春夕焼の盲導犬

傘寿の日迎へし部屋に緑さす

芝居はね戻る現よ春シヨール

さいたま 中井 和子

熊谷 越田 栄子

つばくらめ天地自在に和紙の里

香箱の猫の駅長目借時

尾長跳び一気に散らす八重桜

残る花雀色時二人連れ

逃げ水や揺るる地蔵の風車

鴻巣 大塚 茂子

さいたま 加藤でん治

童心が邪心に化くる潮干狩

逃水やただ真つ直ぐの蝦夷街道

樺太を望む岬や夏近し

駒下駄のリズム不揃ひ春日傘

大仏の螺髪右巻き山の藤

竹の秋開かずの門の脇に道

専修寺へ一里の野道犬ふぐり

初蝶の抗ひつつも恃む風

采配は和尚の一女甘茶寺

逗子湾へ傾き崖の紅椿

鎮もれる山に鐘の音遍路寺

浅草を着物で闊歩春の昼

野遊びや草の匂ひの子を抱きぬ

古民家に入り自由や里燕

逃水や思春期の子の胸の内

S Lの煙たなびき山桜

雀の子風と光に遊びけり

春の闇最終バスのクラクシヨン

弓道場の乙女射る矢に風光る

渡らうか橋のたもとに春惜しむ

春惜しむ畑に終りのあるでなし
囀や明日の天気占ひて

春の風一張羅を身に纏ひ
春の風会ひたき人と出会ひたり
腰痛を忘れてゐたり春の風

蘆牙や大和島根に朝日影

母と子の茶摘体験赤だすき

青天に真白き富士や一番茶

黒猫が膝に重たく春愁

野薊や賊子のそしり受くるとも

武家屋敷たまに陰りて春の雲

花屑に陽の温もりを残しけり

花屑をつけて都電は飛鳥山

雲雀野や立入り難し天の声

春昼や己が綱引く渡し舟

蛍の光歌へぬ子等の卒業す

一山を辛夷の包む峠道

乗客は我のみ余花の無人駅

朝まだき種蒔き鳥の声ばかり

憶えなき花種包み播いてみる

若狭 飛永 鼓

さいたま 染谷 正信

田中 章嘉

伊予 向井 章子

山笑ふ朝の日課の深呼吸
種を蒔き農夫の顔の輝けり

精気みなぎる鳥の飛翔や春の山
大輪や蜂一心に蜜を吸ふ
春深むそぞろ歩きの宵の街

ねんごろに母の忌修し春惜しむ
留学の長姉見送り春惜しむ

春惜しむ雨に烟りし港町

囀や百の老女の鬢鏢と

燕来るこの家の事知りつくし

竹寺の朝日受け止め竹の秋

復興にこども一座の春芝居

兄いもとねぶる経木の草のもち

水平線と同じ高さで汐干狩

砂を吐く汐干の貝と足の指

潮干狩磯に咲きたる傘の華

石垣の角一面の花筏

行く春や路地の影からわらべ唄

区切り良き令和の断酒五月来る

砂漠行くラクダの列も陽炎へり

さいたま 宮崎チアキ

若狭 山崎 郁子

草加 河野はるみ

さいたま 新 曆文

平成の世の見納めの桜かな
草萌えや子山羊のユキちやん人気者
春の暮小走りで過ぐ宅配人
村廻る移動図書館花董
暖かや壁のアートに物語

東京 太田 絹映

曇天や雨たづさへて燕来る
野遊びを老いの支へと決めにけり
童心の瞳にかへる山遊び
春遊び童子の笑みに我も笑む
彼岸くる餡炊く宵の独り言

熊谷 神田 治江

実直な梵妻の掃く花の庭
図書館の窓辺の光春惜しむ
若芝のベリーダンスに沸く拍手
グラス持つ婚約指輪春の宵
春の宵酔ひのややあり梳る

さいたま 橋本 京子

もの芽出づ母校の第二グラウンド
あをさめる桜赤らむさくらかな
初蝶や我行くところ行くところ
永き日や古本括る古き紐
春キャベツ包む新元号の記事

東京 石川 理恵

春愁や捨ててしまつた案内状
梅干のおにぎりうまし潮干狩
おしやべりな母も無口に潮干狩
待ち人が来るまでしばし糸桜
遠足の子に譲られし座席かな

東京 石田 慶子

荒川の流れ揺蕩ふ風光る
逃げ水や買物帰りを先導す
子ら弾けしやほん玉飛ぶ保育園
黄蝶見て昔の友に逢へたよな
尻上げて蜜吸ふ鳥や初桜

さいたま 西幅 公子

久闊の友と遅日の長電話
離陸せるジャンボジェット機風光る
正面の大鐘楼に舞ふ桜
春日傘今は静かな団子坂
名刹の長き参道春日傘

さいたま 笹本 啓子

金管に映る青空ライラック
リラの花学生集ふカフェ「木馬」
ヒヤシンス出窓明るき神楽坂
芙美子へ葉桜の坂三毛二匹
いろは坂カーブミラーに春の色

森 和子

花の雨蠟涙潤るる女人堂

さいたま 大槻 瑳蘭

春の闇薄墨にじむ絹の画布

春の芝刈るにも惜しき雨しとど
敷わらの匂ふ日和や花冷す

さいたま 伊藤 愛子

鰐眠る爬虫類館花の冷え

物書けば花冷の居間肘寒し
方丈記読む夫の居て春座敷

花冷や氷砂糖の青光り

虎杖や筒抜けとなる謀りごと

一語得て出づる図書館春の昼

書き出しの滲む一文字春寒し

水野 興二

川底に命の息吹蟋蟀の紐
観梅や古き木肌に紅一輪

塩野 久子

夕映えの陽にぬくもれる春障子

庭にひと花存在感のヒヤシンス
ビル街の夕日隠れを鳥帰る

ものの芽や親子そろひの無精者

陽のやはし小さき庭にも花吹雪

寒戻りいつもの紅茶すぐに冷む

熊倉千重子

うす紙に包む汐の香桜貝
きしきしと蕾を解かれ春の果

秋本カズ子

どつしりと座りし妻の梅見かな

貨車出づる武甲の裾野かげろひて
移りゆく花壇の色よ春の果

麗日や万葉集の文字辿る

三角の屋根のきはだつ春の郷

禽たちの声もふつくら山笑ふ

平塚 丸屋 詠子

庭の角ことさら赤くやぶ椿
春深し眠りつづける湖底村

川口 田村 節子

電子機器に弱い私よ山わらふ

ぎしぎしと香りも採んで春キャベツ
水切りのあとの静けさ春の川

花惜しみ平成惜しみつつ吟行

機嫌良き俄庭師に蜂が寄り

乗客が誘ひこみたる飛花の片
足を止め歩道橋から春の海

朝礼は苦手なのです葱坊主
十かぞへ遊具替へる子葱坊主
アルバムの二人微笑む春の宵
花降るや令和も戦なきことを
亀の背にしばし安らふ花筏

さいたま 斎藤 みよ

初蝶来出番は白のスニーカー
渡良瀬の水辺に光る葦の角
水音や葦の芽育つリズムらし
初蝶来小さき羽で低く飛ぶ
燕待つ軒深き家そはそはと

栃木 佐々木典子

撓やかに四肢躍動す春球児
春球宴勝者敗者に光るもの
花吹雪疏水のそばの喫茶店
繋ぐ手の温かかりし花筏
満開の花の下にて何語らん

和歌山 宮井美恵子

猫柳湖畔に揺るるお下髪
雲流れ貝穴探す潮干狩
春の宵花の香近き男坂
藪椿探しもとめて山二つ
浮雲の去りて静かや春の宵

さいたま 新井 孝磨

春深し句帳時には備忘録
轉や開拓村は孫世代
卒寿にもときめく心スイートピー
拾ひたる小鳥の空巢山苞に
足踏みのスマホ教室亀の鳴く

いすみ 平石 睦子

山菜の乙な苦みに春惜しむ
番鳥向き合うて鳴く弥生鼠
鉢底に根っこ食み出し春惜しむ
陽射し浴びむくむくたる牡丹の芽
太き茎立ちて畑の華となる

秋山 紅花

啓蟄や祠に道は行き止まり
五七五と口で指折る春の冷え
咲き満てる梅には触れぬ立話
春眠の夢を見るため眼鏡拭く
ばくばくと犇めく鯉の口に春

東京 橋本 竺仙

春日傘回して過ぎぬ交差点
潮風をふつと近くに春日傘
太棹の深まりゆくや春の月
嵌めごろし隔つる庭や春惜しむ
腹筋を鍛へに鍛へ夏隣

山口 韶子

清明や叩いてみたき大太鼓
春惜しむ氷川の杜の朱印展
太鼓橋渡る稚児たち鎮花祭
先付を味はひ飲めば鐘籠
風光りチーム鼓舞する大太鼓

さいたま 村杉 清吉

夜業終へし我につき来る春の月
気も新たに令和元年花重
琵琶で聴く平家の語り風光る
田楽や下がり目孫も受け継げり
花時計正午を示す黄の堇

さいたま 田中 泰子

校長の空咳一つ入学式

横浜 川島 典虎

黒板に師の名書かれし新学期
やはらかな光射し込み竹の秋

高原 和子

入学児何を云うても上の空
幾度も話は戻る蓬餅

春眠のさなかに入るるベルの音
春眠し椅子に座らばうつらうつら

天辺は空に溶け込み山桜
挿木あまた太鼓判押し持たせたり

春眠し約束の駅過ぎにけり

傷痕の癒えぬ枝より花吹雪

大阪 飯塚智恵子

桜咲く小判売り出す令和かな
鉢植に初めてみたる松の花

和歌山 南條きわゑ

行く春のあひたき人に逢はぬまま
つくしんぼ袴を脱がす太き指
色の無き鳥啼き交はす桜かな

桜満開小さな駅のカメラマン

下町の夜風羽織りて浮かれ猫

紀の川にボート一艘春霞

川風に耐へゐて震ふ桜草

さいたま 下川 光子

平成の惜別抱きつ早や四月
根限り平成生き抜き四月生れ

東京 河原 叔子

開門を早めて古刹糸桜

何ともはや迷へる四月雪が舞ふ

田仕事を間近に村の花筵
鉄塔はモダンアートや鴉の巢
小鳥の巢出入り頻りに御神木

土盛り出其処此処含み春の音
土手含む小さな噴火よ露の臺

御手洗に鳩の来て居る夏隣

東京 水落 守伊

夏隣八海山に雲白し

草餅や里の敷ほど恵みあり
強引に元の支柱へ豆のつる

さいたま 山戸 美子

自転車を止めて受く風夏近し

園児らの強がり喧嘩山笑ふ

和らぎて秩父連山夏兆す

草餅を両手でさばく焼き加減

物の芽の朝な朝なと青む庭

中庭の闇より浮かぶ糸ざくら

花筵その真ん中にガスコンロ

蕨 細井 良子

境内を埋めつくせる落花かな

平成を惜しみて桜隠しかな
万葉より選べる「令和」春の風

和歌山 高橋満耶子

花万朶白寿の叔母を見送りぬ

長蛇の列にかへす踵や花御堂

啓蟄や鋭き鳥の目のあまた

洪滞の車中に花の嵐かな

花疲れ優先席の前に立つ

朝ドラの懐かし「おしん」春の川

玄関前会釈してをり黄水仙

さいたま 高橋 敏子

曖昧な別れの言葉春の闇

葱坊主高いの低いの整列す
春の宵ほろ酔ひ君はほつれ髪

さいたま 白田 みち

春の闇影も残さず娘の逝きぬ

はしなくも君に再会春の宵

出来立ての一句を墨で書く四月

葱坊主吹きつさらしに並びをり
盗人も浮き足立ちし春の宵

八十路なる御飯味噌汁花菜漬

老いてなほ花にときめくひと日かな

杉戸 佐々木史女

初ざくら書道昇段試験受く

空青し歓喜の中の黄水仙

福田 育子

昇段の試験の朝の花明り

黄水仙君が御胸に届きけり
ほとほとと今もしあはせ春の闇

ふらここに座れば軋む己が身よ

金婚式いい塩梅に花菜漬

年号の令和と決り山笑ふ

春の雷声高々と句座の衆

水色のドレスに似合ふ春日傘
隔たりを保つ間合や春日傘
逃げ水や田舎屋の旗近づきぬ
花冷えに新しき靴コツコツと
愛猫を送る遅日の庭の隅

さいたま 梅澤 輝翠

花菜風ことほぐ令和匂ひ立つ
意地を張る爺に異議あり春の風
念仏婆一生に悔なし彼岸寺
千年の令和の杉の花匂ふ
春祭漁父の太鼓の勇み打ち

小浜 松島 寛久

逃げ水や橋のたもとで見え隠れ
僻陋に百千年も藤の花
湯けむりや藤のたわわに息止る
「平成」を送りて「令和」藤の花
山けぶる藤の紫うす灯り

藤岡真知子

鶯の遠音に止まる試歩の杖
ゆるゆるとバス行く野道初つばめ
耕しの夫婦背のばす富士の晴れ
植木市鴉まさかの小枝捕る
昭和の歌平成の歌花の散る

横浜 山岸 弘子

山笑ひいよよ火入れの登り窯
皇居の蜜集め銀座へ帰る蜂
腸捻転のやうな彫刻蜂二匹
クレーン車で剪定若き公務員
華道展主役になれぬ菜花たち

山口 富子

義父植ゑし八重桜いま爛漫と
ほのほのと花咲き出でて子ら遊ぶ
豆腐屋の軒親燕せはしなし
朗々と大学校歌八重桜
孫娘桜吹雪の坂駈ける

宮代 関谷多美子

穴を出し蛇投げ入れる宮の森
記憶とぶ母の不思議や春深し
南京錠で一日遊ぶ春の果
母の欲る南京錠やつばめ来る
つばめ来るピアノ教師のきれいい好き

和歌山 葛城千世子

花に浮かれ千鳥ヶ淵より靖国へ
飛花落花みんな散るから俺も散る
耳朶の冷えて隅田の夕桜
いつの間に別れそれきり柳絮飛ぶ
桐咲けり君が好きだと言ひし色

町田 瀬戸雄二郎

前向きに生きると決むる寒の明
寒明けや句会へ急ぐ車椅子
春の宵思はず寮歌口遊む
卒寿過ぎなほ人恋ふる春の宵
四時代共に生きたる老桜

さいたま 川村 治

たをやかに令和へ向かふ春の芝
春句会揃ひ踏みせる男前
褐色の太もも眩し風光る
春惜しむ荒鋤だけの街の畑

飯田 忠男

泣き笑ひ乗せて終電春の宵
春宵の一時壊すデモの列
葦の角子牛を洗ふ水辺かな
槌音や燕飛び交ふ空まさを

安倍 弘夫

緑児の甘き泣き泣き声風薫る
ひとときの期待膨らむ花の種
もどかしき復興の地や蛙鳴く
ゆつくりと谷間に注ぐ穀雨かな

若狭 岡本 祥子

野遊びや子分のままの一人つ子
野遊びや子ら大作の秘密基地
亡き父の書斎の窓に初燕
「御一行」の歓迎板や燕来る

東京 飯室 夏江

日を集め手水舎の水温みをり
押し黙り夫と散歩や花はこべ
クレンソンの緑の濃きを夕餉にと
言ひ難き言葉を胸に春深し

さいたま 小山 敦子

風光る太鼓の桴が天を指し
入相や太鼓結びの花衣
幕間にシードルワイン春惜しむ
靴を脱ぎ靴を揃へて春の芝

石田水音子

牧場の萌ゆる若草地平線
春日傘モネの絵画を真似て描く
先斗町玄関先に春日傘
風光る濡れし一葉の輝けり

千坂 平通

惜春や玻璃戸を開けて露天湯へ
若芝の真中を通る車椅子
若芝や十字路にある案内板
幹太き木蔭のベンチ風光る

上野 宜子

高台の仮設住宅地虫出づ
平成より令和へ引継ぐ春眼
公園のパンダのベンチ地虫出づ
五十輜つづく貨物や春の暮

山下ユリ子

白髪にかぶる手拭野蒜摘む
入学児迎ふ教師の白墨絵
浅草の仁王門より春日傘
かたち変へ川面に白し花筏

さいたま 武田 重子

お清ましに手鞠麩遊ぶひな祭
目貼り剥ぐ孫は転職深呼吸
詰衿の服もお下り孫入学
その昔修身授業目借時

藤 沢 小島喜代子

裏木戸にかたまりてあり濃山吹
磨かれし長き回廊春の水
大鳥居ぬけて手水舎花の雲
遠足の列トンネルに響く声

川 崎 鈴木 玲子

子とみれば梅雨のまんなかページ繰る
南風船とテープを揺らしけり
水中花愛する人を忘れなき
夕焼に膝を抱へる海辺かな

所 沢 関根 千恵

初蝶や鉄剣出でし古墳訪ふ
初蝶の五感目覚むる小さき翅
庚申塔燕飛び交ふ道しるべ
帰還かな雨の燕の深庇

春日部 諏訪サヨ子

風光り新元号の決まる朝
豆腐屋のラッパ遠くに暮遅し
嵯峨野路異人の後を春日傘
三面鏡で着付けの稽古する遅日

さいたま 竹澤 和子

ドライブイン注目浴びる燕の巣
公民館指揮者の向かう燕飛ぶ
八重桜の並木遊歩の御苑かな
駐車場の古巣三つ四つ燕来る

さいたま 森下美智枝

気分晴れお花畑で春日傘
写真ばえ足湯につかり春日傘
帰宅時間を自覚してゐる子に遅日
突堤に垂るる釣糸風光る

小川 洋子

ライラック路地の石段別世界
リラ薫り坂の上なる外人墓地
草の芽や急坂登れば友の家
リラ咲いて君に捧げる花言葉

長井喜代子

飛ぶ燕麻酔を語る若き医師
フレンチの新人ボーイよ初燕
崖下の野遊び子等は水の中
逃げ水の彼方に揺るる無人駅

東 京 鈴木 和子

初陣の一罨蹴つて夏隣

東京 柳父 はる

花筵白寿の母は車椅子

さいたま 湯浅 和

日永しそこはかとなく歩ゆるむ
ものの芽や余所見する間の二、三ミリ
スニーカーの軽ろき足取り夏近し

おしやべり夢中銀座通りを春日傘
手洗ひにうかと忘れし春日傘
休耕田赤き紫雲英の海となる

「令和」の謂れ万葉なりや草の餅

さいたま 高 わこ

リラ咲いて好みの布を裁ちにけり
ライラック香に誘はれてツーステップ

落合 和枝

強打者を迎へて沸くや春キャンプ

登り坂足もと一面名草の芽

強風の後の水辺に花筏

坂道や急ぐ家路に若菜和へ

春嵐いかに過せし手術の友

野村 美子

鬼石 榊原 聰子

学校に少し慣れたよ八重桜

花の雲そよふく風も桜色
青麦や夫の足どり健やかに
ひっそりと深山のみぢ芽ぶきけり

桜散る雨の京都の人力車

フロン트에影の横切る初つばめ

暮参り海辺の街で浅蜷めし

枚方 寺内 洋子

一齧りせし草餅に指の跡

さいたま 鈴木 藻好

校舎から飛び立つ朝のつばくらめ

里帰り母の十八番の草の餅
春寒や我家に人気なき今は
半白の髪に爽やか春の雨

ペランダの猫に春愁ありにけり

三元号生きるつもりよ五月来る

行く春を窓辺にひとり惜しみけり

さいたま 緒方みき子

芽吹き山句会の友の笑ひ声
平成の想ひ出語る四月かな

鬼石 加藤ナヲ子

落花盛ん饒舌の友うとましく

菜の花や右に左にゆれ動く
色づいて夫の形見の藤の花

野遊びや号令かける子のありて
野遊びにひと息つきて花占ひ
野遊びの順番待ちの土手すべり
ウエディング飛入り参加のつばめ舞ふ

暖かき日射しを浴びて坂上がる

さいたま 内田 雅代

自転車で坂を下るや春の雨

啓蟄や地球が蠢く音微か
菜の花の空へと続く大畠
里の野にぼんやり浮かぶ花明り

三郷 沼尾 岳

リラの花甘き香りでむせかへる

たんぽぽを父にあづけて手をつなぐ

吉川 杉浦 理恵

春星追つてオーブンカーが風となる

山桜曖昧模糊に里染まる
燕来る泣いてた吾子も二年生
初燕土間の古巣に里帰り

さいたま 菅原 真理

ジェット機のやうに消えゆく初つばめ

花冷やニューモード着てやせがまん

芽柳を御苑の風のもてあそぶ

さいたま 櫻井よし江

何処からか徹る槌音花の昼

店先の日差しに沿うて石鹼玉
薬仕事小猫三匹爪の跡
犬吠えて大根の花零れ落ち

東京 齊藤たけし

麦青むなか単線の燥ぎゆく

春陽浴びブロンズ像も伸びをせり

東京 畑宮 栄子

遠足やてるてる坊主軒先に

花曇り車椅子押す小学生

古墳へと誘ふ道の八重桜

越谷 阿部 幸代

畳屋に燕飛び入る宿場町

鉄剣の眠りし古墳風光る

宴去り静寂に泛ぶ老桜

さいたま 反町 修

花月夜宴の後のファンタジー

桜回廊雲に溶け込む先端部

☆

☆

季音抄 鬼之介

窓少し開けて瀬音を鮎の宿
草笛をぶつきら棒に童唄
夏草や晴耕雨読日課とし
本堂の闇のしかかる薪能
性別の欄に「女」と初蛙
幕下の結び初め鬻や青嵐
染抜きの家紋を羽織る夏の蝶
鬼面にもかすかな憂ひ薪能
口髭を薔薇に近づけ異邦人
茶房出てうふふの空へ差す日傘
若き日は引出しにありサングラス
青嵐ガラスの馬も駆けて出よ
野に戻り抱卵の鶴たくましき
夏近み心も撓ふ手のモデル
花冷えやししまひしままの舞扇
夕映えの八橋に聴く行々子
ぎゆつと抱き生確かむる甘藍よ
回り道して帽子買ふ夏隣

星野 和葉
茂木 和子
森 千代子
矢作 水尾
山中 順子
山中みどり
鳥羽 和風
吉澤 純枝
小倉 倭子
柚木 治子
宇田 白鷺
十倉 和子
原田 想子
山田美佐尾
大場 順子
井上 玲子
田中 千穂
森川 義子

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内

(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内

(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄 鬼 之 介

行く春や逆立ちで見える古校舎
 俗体の僧に夜毎の濃山吹
 酒林躲して飛ぶや初燕
 鳥雲に入りたる辺り母御座す
 すれ違ふ佐保姫の影萌黄色
 ノーサイド大の字に寝る春の芝
 旅客機が音の尾を引く大霞
 紋白蝶杖つく姥のあとやさき
 肅然と春夕焼の盲導犬
 尾長跳び一氣に散らす八重桜
 童心が邪心に化くる潮干狩
 竹の秋開かずの門の脇に道
 古民家に入り自由や里燕
 弓道場の乙女射る矢に風光る
 春の風一張羅を身に纏ひ
 黒猫が膝に重たく春愁
 花屑をつけて都電は飛鳥山
 乗客は我のみ余花の無人駅
 向井 田中 染谷 飛永 加藤でん治 越田 栄子 曲淵 徹雄 青木 鶴城 大塚 茂子 中井 和子 横山 君夫 保坂 翔太 近藤 徹平 野田 静香 日高 徹 原田 秀子 正木 萬蝶 渋谷きいち

句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第1水曜・午後1時	本所ビッグシップ	山中みどり	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノアル	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・ 午後1時30分	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	吉澤純枝 山田美佐尾
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋 勉 代	森本早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中 順子	西山貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ

水 明 例 会 案 内

水 明 令和元年七月一日発行 毎月一日発行

(第九十二巻 第七号) 定価 一〇〇〇円